

九戸党滅亡

小説『天を衝く』が描かなかつた亀千代の最期

〜若宮八幡宮(田子町)、大日堂舞楽(鹿角市)を巡る旅〜

九戸政実ゆかりの地を歩く作家・高橋克彦さんの旅も、いよいよ大詰め。今回は政実が未来への希望を託した嫡子・亀千代のその後を検証する。道連れは高橋原作の「Jシカル アテルイ」でヒロインを演じた劇団わらび座の看板女優・丸山有子さん。



亀千代を祭る若宮八幡宮



亀千代の最後を伝える古文書の写本

今から約400年前の天正19年(1591)、奥州武士の誇りを守るため、九戸政実は豊臣秀吉が差し向けた大軍を九戸城で迎え撃った。政実が世継ぎと定めた亀千代も鎧を身に付け、天晴れな若武者ぶりを示したに違いない。

丸山 もしかして……この籠城戦が亀千代の初陣とか？

高橋 だと思っよ。亀千代の年齢が不明なので断言はできないけど、僕の小説『天を衝く』では11歳の設定にしてある。

「手前は断じて城に残ります！」
亀千代は涙声で訴えた。
「残りますよ。」
政実が苦笑いを浮かべ、

「城とともに討ち死にする気であるなら、そなたにも踏ん張って貰うが、おれは投降するのだよ。これまでの働きで十分であろう。そなたもよく養ってくれた。この城を失うては、むしろ生き延びることに幸い」と、それを承知でそなたに頼んでおる。」
「一緒に死にたいであります。」

丸山 亀千代が城を脱出したのは父・政実の意向ですか？

高橋 武者が命を捨てる場所は己れ自身で決めるもの。戦国の世を存分に戦い抜いた政実は九戸城をその場所と決めていた。でも亀千代は違う。まだ自分の人生をまとうとしていない。政実は何としても亀千代を助けようとした筈だ。

「亀千代はなおも言ひました。喜ぶのは敵ばかりだ。許さぬ。政実は」喝した。
「おれは無駄に死のうとしたことな二度とて(何)生き延びておれぬ道を貫け」
「無駄と……言われますか？」
目を真っ赤にさせて亀千代は見詰めた。
「その気概あれば九戸党の再興とてやり遂げられよう。城の者が赦されたときはそなたを旗印とする。」
高橋克彦著『天を衝く』講談社より

偽りのない心で拜まれたいと亀千代の霊が泣いて告げた。そこで祠を作り、馬にまたがった亀千代の木像を置いたのだ。



丸山 落城後の亀千代が生き延びたのが処刑されたのか、諸説入り乱れていると聞きました。

高橋 『天を衝く』は、生存説の立場だ。九戸家菩提寺・長興寺の薩天和向が津軽に逃したとね。だけど亀千代はこれから向かう青森県の田子町でくなくなる可能性が高い。

丸山 えっ？なのに、どうして小説では生存説を……。

田子町の旧家に亀千代の最期を記した古文書が保管されている。それによれば亀千代を捕らえたのは、南部信直から落武者狩りを命じられた佐藤軍郷なる武士であった。軍郷にとって亀千代は主君と同じ南部家の血が流れる貴人だ。やむを得ず命を頂戴するが宮を建立し神として祀ると軍郷は誓ったと云う。その宮が現在の若宮八幡宮である。田子町にはまた亀千代が着用したと伝えられる黒革の胴と笠も残されている。



祠に置かれた亀千代の木像

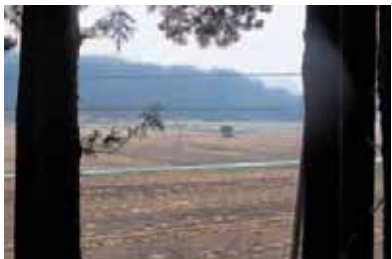
亀千代最期の地に作られた祠の前で

高橋 随分と小さな胴だね。小説には11歳と書いたけど、もともと幼かたかも知れない。

丸山 こんなに小柄な子供が族全員殺され、わずかな家来とこまで逃れて来たかと思っよ切なくあります。

高橋 笠に笹竜胆の模様……豊臣家と同じ紋だ。敵の目を欺くため、わざとこの笠を被っていたのかも。

若宮八幡宮の正面に立つと、道を挟んで広がる田んぼの中に祠が見える。祠が建つ以前は縄で囲われ理由は分からぬまま神聖な土地だとされてきた場所だ。ある時、田の持ち主の家に不思議な目撃談が寄せられた。白い馬に乗った若武者が縄囲いまで来てゆくと消えた。もしや亀千代はあそこで殺されたのでは？。また別な時、酔った男が縄囲いに立ち小便した途端、激しい雷雨が帯を襲った。急いでお神酒を若宮八幡宮に供えようと怒々天気が回復。イタコを頼んだら、私が命を落とした場所だ。嘘か。



若宮八幡宮の木立の間から祠を望む



若宮八幡宮で亀千代着用とされる黒革胴を手に



亀千代が使用したと伝えられる陣笠



皮の上に黒漆を塗り重ねた胴

原田は政実の首を埋めたばかりの塚に手を合わせた。
「ここにはもつ戻れなかも知れない。亀千代が鹿角の寺で待っている。」
長興寺の薩天和向の手引きによるものだ。南部の地に海より津軽の方が安心か。
(中略)
「……おまえはあの世で九戸党を率いて新しき国を作れ。怒らずに俺の居場所も用意しておけよ。政実、聞こえたか？」
薩天は塚をじっと見詰めた。
そのとき、風がどどどと吹いて木々を揺らした。薩天は何度も頷いた。
高橋克彦著『天を衝く』講談社より